

## 秋まき小麦「きたほなみ」 本年のは種作業について

### 1 は種適期・は種量

#### (1) は種適日は、9月21～22日頃

極端な早まきは過繁茂や倒伏を招くほか、縞萎縮病の感染リスクが高まります。遅播きは生育量が十分確保されず、浮き根などの冬損が増えます。適期は種に向け、準備を進めましょう。

#### (2) 適期のは種量は、160～180粒/㎡

気温が低い山間地や傾斜地などの条件不利地や、発芽率の低下が予想される地帯では、表1の目安より1～2割多めには種しましょう。本年産の種子は千粒重がやや重いと考えられるため、例年より多いは種量となります。は種機の設定に注意しましょう。やむを得ず遅まきとなる場合は、255粒/㎡を上限には種量を増やしましょう。

表1 「きたほなみ」のは種期とは種量

〈アメダス観測点〉	は種適期【適日】
芽室	9/19 ←【9/22】→ 9/25
帯広泉	9/18 ←【9/21】→ 9/24
更別	9/18 ←【9/21】→ 9/24
は種粒数(粒/㎡)	160～180
千粒重 40g の際のは種量(kg/10a)	6.4～7.2
千粒重 42g の際のは種量(kg/10a)	6.7～7.5

注1：は種適期は主茎葉数が5葉程度確保できる日を表す(過去10年平均の積算気温より算出)

注2：は種量は、千粒重38gまたは40g、発芽率90%として算出

千粒重が異なる場合には、以下の計算をします。

$$\text{は種量 (kg/10a=g/㎡)} = \text{は種粒数 (粒/㎡)} \times \text{千粒重 (g)} \div 1000$$

### 2 は種精度を高める技術

は種深度の目安は、地表から2～3cmです。使用するは種機別の留意点(表2)を確認し、対策を検討しましょう。肥料や種子の積載量、作業速度、は種機のタイヤに付着した泥などもは種精度に影響します。適宜、種子の深さを確認しながら作業しましょう。

表2 は種機別 作業上の留意点

	外国製ドリル	国産プランタ
注意点	は種機自体が重いため、は種深度が深くなりやすい。	は種深度が浅くなりやすく、砕土が粗いと覆土が不足し発芽ムラになる。
対策	パワーハローで整地する。ロータリハローの場合、は種床を膨軟にしすぎない。 は種前または後に、鎮圧を実施する。 ダブルタイヤ装着等で車輪の沈み込みを軽減する。	砕土・整地を十分に行い、種子の露出を防ぐ。 作業速度を4km/h以下まで落とす。

### 3 土壤改良、銅欠乏、排水対策

小麦作付け予定ほ場では事前にpHを測定し、pH5.5～6.5を目標に改良しましょう。  
pHが5.5を下回ると小麦の根張りが極端に悪化し、浮き根や生育不良の原因となります。

銅欠乏症状の出やすい地帯（腐植の多い火山性土等）では銅の補給が必要です（銅入りの基肥や土壤改良資材等の施用）。ただし、銅は過剰障害も生じやすいので土壤診断基準値に基づいて適正量の土壤改良資材を施用しましょう。

透水性の劣るほ場では、心土破碎、額縁の溝切りなどによる排水対策を実施しましょう。

### 4 基肥の施用量

基肥の窒素施用量は、土壤タイプに関係なく4kg/10a程度で十分です。  
土壤診断に基づき、過不足に応じて銘柄等を選んで施用しましょう。

窒素	リン酸	カリ	苦土
4kg	12～15kg	9～10kg	3～4kg

### 5 雑草処理

多年生雑草が多いほ場は、耕起前にグリホサート系除草剤で処理しましょう。土壤処理剤は処理時期により使用量が異なるものがあるため、小麦の生育状況を必ず確認した後に使用しましょう。

表4 秋まき小麦ほ場の1年生雑草に対する除草剤使用例（全面土壤散布）

除草剤名	処理時期	使用量 (ml/10a)	使用回数
ガレーズ乳剤	は種後～出芽前	200	1回
	小麦出芽後～出芽揃期	150～250	
	小麦の1～3葉期	100～150	
ボクサー	は種後～小麦2葉期	400～500	1回
ガルシア フロアブル	は種後出芽前	150～250	1回
	小麦の出芽直前～小麦3葉期	100～200	

### 6 なまぐさ黒穂病への注意

なまぐさ黒穂病は、5振興局管内で発生が確認されています。現在、十勝管内での発生は確認されていませんが、道内の発生地域が拡大傾向にあるため今後の発生動向に注意が必要です。

#### ■■■■■■なまぐさ黒穂病を未然に防ぐためのチェックリスト■■■■■■■■

- 遅まきしない！  
は種時の土壤水分が高く、地温5～15℃以下で感染しやすい
- 連作は避ける！  
連作により適期は種でも発病度が上がることが報告されています
- 排水対策は万全に！
- 消毒済み種子を使用する！
- 深まきしない！